

二松學舎 松苓会報



CONTENTS

- P2 卒業生の皆さんへ
- P3 創立140周年記念募金協力をお願い
- P4 平成28年度ホームカミングデー
- P6 教壇を去られる先生
- P7 松苓会各支部活動報告
- P13 卒業生だより
- P16 活躍する卒業生
- P17 大学だより
- P18 教職支援センターから
- P19 松苓会のあゆみ(8)
- P21 あの頃の学生部・教務部
- P22 会員からの便り・松苓日誌抄 他
- P24 「高校生のための国際政治経済」の紹介
編集後記 他

No.57

2017年3月16日

卒業生の皆さんへ

二松學舎松苓会
会長
廣田 克己

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

「二松學舎松苓会」（以下、松苓会）は卒業生の皆さんの入会を歓迎いたします。

「松苓会」は専門学校1期生の卒業とともに昭和6年に創設され、本年が85年になります。開塾以来の本学の卒業生は

卒業生の皆さんへ

二松學舎大学
学長
菅原 淳子

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在学中の数々の思い出を胸に、二松學舎大学を巣立ち、新たな人生への第一歩を踏み出そうとしていらっしゃる

3万人以上になります。そして、先輩たちは世界中の様々な分野で活躍しています。

本部の他に全国47都道府県に支部を持ち、支部ごとに活動をしています。その活動は「ホームページ」や「松苓会報」を通してお知らせしますので、時々チェックしてください。今後、皆さんと松苓会との連絡先は、本部又はこれから住む都道府県の支部となりますので、連絡を取ってください。

さて、まず申し上げたいのは、皆さんが卒業して最初に行うことは、保護者の皆さんに感謝の気持ちを伝えるということです。大学進学が当たり前の時代とはいえ、大学4年間を経済的、精神的に支え続けることは大変なことです。いえ、大学だけではありません。生まれてから今日に至るまでの子育ては並大抵ではな

皆さん、皆さんの前にはさまざまな可能性を持った道があり、また自ら新しい道を拓くこともできるのです。どうぞ自信を持って、新たな一歩を踏み出していただきたいと思います。

在学中は学業だけではなく、サークル、ボランティアやアルバイトなどのさまざまな活動を通して、視野や人間関係を広げ、たくさんの経験を積まれたことと思います。そうした経験の一つ一つがこれから皆さんの人生の中で、貴重な財産として意味を持つてくると確信しています。

卒業生の皆さんにとって、大学を卒業することは大学での学業の終了を意味し

かったはずですが。今の皆さんには実感できないかもしれませんが、やがて子育てをする年齢になった時に知ることになるはずです。子供を育て上げることは、人生の一大事業です。誰もが認めるような歴史的な仕事に比べても決して引けを取ることはありません。その保護者の皆さんが今日、節目を迎えたのです。最も祝いの言葉を受けるべきは保護者の皆さんだと思います。感謝の言葉もです。

次に皆さんがなすべきことは、これから飛び込んでいく場所で自分の居場所を一日も早く作ることです。社会はそれほど甘いものではないことはご存じの通りです。職場では新人の居場所は与えられないのではなく、自分で作るものです。また家庭人、社会人としてのポジションも大切です。これまで学び、考え、実践してきた知恵を大いに駆使してください。

ですが、決して学びの終了ではありません。むしろこれからが始まりであって、これまで学んだことを基礎にこれからの自分の人生をスタートさせることであり、学びも続いていくことになるでしょう。今日、人生100年時代を迎えたと言われています。人生の様々なステージの変化に対応する能力をつけていくためにも、皆さんには是非、生涯を通して学ぶ姿勢を持つて頂きたいと思います。

これからの人生の中で様々な問題に直面した時、皆さんには自らの力で解決方法を見出すことが求められると思います。そこで問われてくるのは、主体的に取り組む力、自ら考える力だと思います。

いよいよ皆さんの人生の本番というべき生活が始まります。当分は余裕などないと思います。社会人としての基盤づくりに全力を尽くしてください。そして、余裕ができたら帰ってきてください。「松苓会」はいつでも皆さんを待っています。しかし、その間にも松苓会との繋がりがだけは持つていてください。

最後に、もし余裕がある時やリフレッシュしたい時は、毎年実施される「ホームカミングデー」「名刺交換会」や各支部主催の総会、文学散歩、賀詞交歓会、また折に触れて実施される「同期会」「ゼミ会」「サークル会」等に顔を出してください。恩師や学友、先輩・後輩たちとの語らいは、きっと明日からの力になると思います。

どうぞ身体に気をつけて、逞しく生きてください。

皆さんがこうした力を、大学時代に身に付けてくださったと思っています。社会人となった時に、大学で学んだ専門を必ずしも生かせるわけではないかもしれませんが。けれども学びの姿勢や、幅広い基本的な知識や教養はきっと皆さんを助けると信じています。

皆さんには、社会人としての自覚と責任を持つて、社会に貢献していかれることを期待いたします。さまざまな可能性を持つていらっしゃる皆さんの前途が希望にあふれることを祈って、贈る言葉といたします。



漱石アンドロイド

**松苓会は、創立 140 周年記念事業を支援しています。
募金に御協力ください。**



文学部都市文化デザイン学科の研究拠点「AKIBA Lab. (アキバラボ)」

二松學舎創立 140 周年記念募金 (二松學舎教育研究振興資金) へのご協力をお願い

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

平素は本学の教育研究活動にご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、本学は本年 10 月 10 日に創立 140 周年を迎えます。これも偏に皆様のご支援の賜物と深謝申し上げます。現在本学は、創立 135 周年の際に策定した、長期ビジョン「N' 2020 Plan」の実現に向け、教職員一同、不断の改革努力を行っている他、2030 年における社会情勢やニーズを視野に入れ、本学のあるべき姿をまとめた新長期ビジョン「N' 2030 Plan」の策定に向けて検討を始めました。

創立 140 周年を機に、「いままでの 140 年、これからの 140 年」をテーマとした創立 140 周年記念事業を進めて参ります。具体的には、大学で文学部を 67 年ぶりに改組し、平成 29 年度に新学科「都市文化デザイン学科」が設置されます。現在は秋葉原に新学科の研究拠点「アキバラボ」を設置するため、施設の整備改修工事が進んでおります。一方、国際政治経済学部も学部開設以降 25 年ぶりの改組の一環として、平成 30 年度の新学科開設を目指し、現在検討を進めています。

また、本学の卒業生である文豪・夏目漱石を人型ロボット「アンドロイド」として現代に蘇らせ、授業用プログラムを開発して「アンドロイド」による授業を実施する「漱石アンドロイドプロジェクト」が進んでおり、現在「授業用プログラム」の開発に着手しております。

このような将来を見据えた事業の推進には財政基盤の安定化が不可欠であることから、平成 19 年度から「二松學舎教育研究振興資金」の募金制度を設け、毎年一定規模の寄付金収入を確保することに努めているところです。

従いまして、時節柄まことに恐縮ですが、上記創立 140 周年記念事業の一助とするために皆様からの募金を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

敬具

＜納入方法＞

寄付金の納入は、本学のホームページからインターネット募金窓口

(<http://www.nishogakusha-u.ac.jp/news/bokin2.htm>) を経由したクレジットカード決済・コンビニ決済・ペイジー決済・インターネットバンキングによるお振り込み、若しくは専用振込用紙による銀行振込・郵便振替をご利用いただけます。

専用振込用紙をご希望の方はご郵送致しますので、下記担当部署までご連絡ください。

【寄付金担当窓口】 二松學舎大学 企画・財務課 TEL. 03-3261-1298 (月～金：9：00～16：30)

＜所得税控除について＞

この寄付金は「特定公益増進法人」に対する寄付金となり、寄付翌年の確定申告の際、所得税法上の寄付金控除の優遇措置が受けられます。

※確定申告についてのご相談は、所轄税務署へお問い合わせください。

ホームカミングデー

平成28年10月29日（土）、午前10時から第12回ホームカミングデーを開催しました。

今年度は、全国から約120名の参加者が集まりました。今年度のホームカミングデーは、大学学園祭「創縁祭」と同時開催のため、例年行っておりまして13階ファカルティ・ラウンジでの懇親会が実施できませんでしたが、その代わりとして、ホームカミングデー実行委員会では、たくさんの方のイベントを企画して、卒業生の皆さまをお迎えすることとしました。

九段1号館11階エレベーターホールに開設した受付では、漱石タオルや二松学茶（本学で考案した名称のお茶）など、二松學舎大学オリジナルグッズのプレゼントがあり、また、学園祭の出店で利用できる買い物割引券の無料配付もありました。受付が済み、カフェに模様替えされた会場の会議室に進むと、コーヒーや茶菓子等が用意された交流サロン（懇親会会場）となっており、旧友との出会いの場として、また交流の場として、活況を呈していました。また、恩師との再会、親睦を深めることを目的に「なつかしのあの先生との懇談会」も同じ会場で開催され、当企画には、ご退職された文学部教職課程の大柳勇治特別招聘教授（当時）、国際政治経済学部金子茂名誉教授のお二人をお招きし、和やかな雰囲気のもと、多くの卒業生の方々が在学当時を思い出し、昔話に花が咲きました。

「最新の4号館へのキャンパスツアー」では、平成26年度竣工の新館を披露しました。また、九段1号館地下3階の大学資料展示室の周囲を会場として、10月24日（月）～10月30日（日）の期間に、「卒業生作品展」を開催し、多くの卒業生から作品として書や写真、絵画など35点の展示がありました。

当日は、出店の飲食を味わいながら思い出話を語る方、ご家族でいらっしゃった方など、大盛況でした。

次年度のホームカミングデーも、多くの卒業生の方にご来場いただけるよう企画いたしますので、是非ご参加いただきたく思います。

（実行委員 鈴木道之介）



「大柳先生を囲む会」に参加して

鈴木雄三（文79）

袖振り合うも多生の縁と言うが大柳先生との出会いは、まさにそんな出会いだった。

私が3年になるうとする春、8階にあった教職支援センターを訪れた。そこにいらっしゃった、身長が高く若々しい笑顔をしていたのが、大柳先生であつた。センター長の松葉先生に紹介をしていただき、挨拶を済ませると、笑顔で「君が二松學舎で初めて話を交わした学生さんだよ」とおっしゃったことを今でも覚えてる。

その出会いが私にとっての縁となり、先生の教職の授業を受講した。先生の授業は、今日的な教育問題を扱う事柄で学生の私からすると、現場の声を生で聞けるととても新鮮な授

業であつた。また、先生の人柄にも感銘を受けた。演習形式の授業であるから、学生が発表を行うのだが、どのような発表にも、学生の考えを肯定的に受け止め、温かい言葉をかけ、我々に希望をくださった。私は、授業の内容ももちろんであるが、それ以上に大柳先生の背中から教師のあべき姿を学んだ。

今回、「大柳先生を囲む会」で先生にお会いしたのは、実に四年ぶりだった。若々しいのは相変わらずで、とても古希を迎えようとしている人とは思えない。私も含め、教職の現場にいる我々の話に熱心に耳を傾けている姿と、あの優しい笑顔に大学時代の先生との思い出がよみがえるような思いだった。

金子先生懇談会 「カバディW杯報告」

N.S.Revival 主将

仲條靖史（文学部三年）

カバディとはインド発祥の国技で、インド国内ではプロリーグもある圧倒的人気のスポーツです。五輪種目ではありませんが、アジア大会の正式種目です。

我が二松學舎大学は日本の大学カバディチーム発祥校であり、柏キャンパスには記念碑があります。その建立にご尽力された金子先生へご報告ができたことはとても光栄でした。私は一年時に先輩、同輩有志と共に学内サークル「N.S.Revival（リバイバル）」を結成しカバディを始めました。このサークルは、その名のとおり二松（NS）に途絶えていた歴史あるカバディの復活（Revival）を誓ったものです。

金子先生へは日頃の練習や大会成績（全国学生カバディ選手権準優勝）、そして私個人として昨年10月インドで開催されたカバディワールドカップ（W杯）に日本代表の一員として参加したことをご報告しました。

九段キャンパスにおいては日頃の練習や活動に制約がある中でチーム並びに個人で一定の成果を挙げて参りましたが、それに対して先生から色々なお話や貴重なアドバイスを頂きました。中でも、より良い練習環境を築くために「さらに鍛錬し、着



実に成績を残してゆくことが大切である」というお言葉を頂いたことが特に印象に残りました。



二松の香り

三浦真琴（文52）

十月末、卒業生作品展に足を運ぶ機会に恵まれました。展示会場の階に降り立つとスツと墨の香りが……ちょうど書道の授業の最中でした。新校舎となつてはいますが、墨の香りと共に一気に昔の記憶がよみがえりました。当時、書道の授業では個性豊かな多くの先生方に教えを受け、放課後、書道部の先輩方からは文字通り書道の「いろは」から、表具や拓本取りの方法等も教わり、また、美術館、博物館にも引率いただいたて、今にして思えば豊かで有り難い時間が流れていました。まちがいないく現在の自分のベースとなっているのは墨の香りが漂うこの空間でした。



当時のご縁が今につながり、この作品展にお誘いを受け、同級生の天舛さんと共に出品させていただいておられます。作品展の時期が近づくにつれて連絡を取り合っており、二松に思いを馳せ、それぞれ何を出品するか考えています。今回は図らずも同じ「花」をテーマにした言葉でしたが、全く違った世界観で、とても刺激を受けました。よき書友です

資料展示室を囲む廊下沿いに展示された各作品からは、出品者の皆様の静かな、でも、熱い思いが伝わってきました。作品展の開催に尽力されている方々に感謝するとともに、140周年を迎える二松學舎の益々の発展をお祈り申し上げます。

教壇を去られる先生

二松學舎大学での思い出

家井 眞



本学に於ける思い出は言葉に尽せぬ程多く、ここに書ききれない。そこで学部・大学院で受けた恩師と学恩についてその一部を記す。

加藤常賢先生（維軒、一八九四～一九七八）からは、古典を研究するために清朝考証学・文字学・民族学・宗教学等の補助学の必要性和大切さを教えて戴いた。また研究者として「自分が理解できぬからといって、他を否定してはならぬ」「研究者は謙虚でなければならぬ」（御本人はこの逆だった）とも戒められた。学部の中国思想史の授業で、出欠を取り終わってすぐ、教室を抜け出した学生を見つけると、血相を変えて教室を走り出した先生、十分後にゼムゼム言いながら帰り、教卓に寄りかかり息を整え、「馬鹿野郎が、追いつけなかったがや。君達に怒っても仕方ないんじゃないか」と言いながら、あらためて出欠を取り直し、逃げ出した二人を特定していた。授業中に私語していた学生にチョーク箱（木製）を投げ、その前列の女子学生にあたり、驚いて泣きだすと、「すまん、すまん、チョークを投げるつもりだったんだがや。君じゃないんじゃない。後ろの男子なんじゃ」と顔を真っ赤にして詫びていた。大学院

の授業『経義述聞』は20分遅れ、十分早く帰るのが常で二十分は雑談だった。或る時Y君が「僕は高い授業料を払っているのに、授業をして下さい」と言うと、「わしは学談してるんだがや。分らん奴は出ていけ」と怒鳴っておられた。今、自宅の仕事部屋で先生が揮毫して下さいた「実事求是」の扁額が私をにらんでいる。（拙考「加藤常賢―略歴とその学問」『二松學舎の学芸』二〇一〇年。「家井眞が語る加藤常賢」『書道ジャーナル』二〇一〇年参照）

橋川時雄先生（醉軒、一八九四～一九七八）からは、『芸文類聚』等の類書を資料として使うと便利であり必要だ、研究対象を好きになって楽しまなければ本当の研究は出来ないことを教わった。「陶淵明が貧乏なわけがありません。地主ですから。こっちからあっちまで馬で二日もかかるんですから。ファファファ。貧乏だ貧乏だって、あれは遊びですな。ヒッヒッヒッ」ととても楽しそうだった。新人生の時、校舎に入ろうとしていると風呂敷包みを持った背の高い老紳士が、「君、一緒にシヨンベンしましよ」と言うや、校舎の板壁に放尿を始めた。また、授業が終わった後、A君が「これ見ろや」と困った顔でノートを開いて言う。そこには先生の抜けて飛んだ黄色い歯があった。先生に書いて戴いた色紙は天袋にしまっておりある。

石川梅次郎先生（濯堂、一九〇九～二〇〇三）には、中国古典を厳密に訓読することの必要性、訓読は翻訳技術だから完全にマスターせよ、ついには調子で読むのだと教わった。学部時代四年間毎日曜日先生のお宅へ通い、『毛詩伝箋通釈』を読んでいた川久保広衛氏の後、『史記』を読んで戴き、私の漢文訓読はここで鍛えられた。毎回昼食と夕食を御馳走に為るのが楽しみだった。困った事は、私が弟子の中で最年少の為、書庫の根太が折れたといっっては床下にもぐられ、雨が降って雨漏りがするといっっては屋根に登られたことで、川久保氏から「おい、先生の家（うち）まで来いよ」の電話が恐かった。先生が書いて下さった自作の漢詩が実家の床の間に飾ってある。

赤塚忠（きよし）先生（一九一三～一九八二）からは、中国古典を読む場合、第一次資料即ち甲骨・金文等で実証することの大切さと面白さ、古代文学・思想は総て文化史に統合し、総合的に研究しなければならぬことを教えられた。その為に極めて広範囲の学問を要求された。先生には大学院の五年間、毎月三〇〇〇円ずつ「おこづかい」を戴いていたが、或る時三〇〇〇円と一万円札を出し、「どっちを取る？」と聞くので躊躇することなく一万円札を取った所、「さて、さて、それを取られるとわしが旺文社に行けんだろう」と、一万円札を取り返された。合宿について行った一日目、ゼミ生が予習をしておらず、「わしは勉強もせん奴につき合う程暇はない。明日帰る。後は家井君が見とけ」と激怒した。翌朝

本当に帰ると言うので駅まで見送りに行つて「先生財布を出してください」と願ひ一万円を残して全部戴いた。電車の中の先生の顔は今思い出しても楽しくなる。先生が書いて下さった「涼」の扇面を大切にしている。（赤塚孝雄・池田知久・戸川芳郎・松丸道雄・家井「先学を語る―赤塚忠博士」『東方学』一二六輯、二〇一三年参照）

学部・大学院・職場を通じて大変お世話になった先輩に川久保広衛名誉教授（一九三四～）がいる。「川久保さん」は駘蕩とした人で、決して己の苦しみや怒りを表に出さなかった。古典と併せ武田泰淳等の小説を読む楽しさを教えてくれ、時々小さく褒めて下さった。私にはそれがとても嬉しかった。

まだ書き足りぬことがこの一〇〇倍もあるが、已に紙数を超過した。二松學舎の思い出は、私にとっては人との思い出に尽きる。ここで学び、職に就き、まもなく定年を迎える。特に優れた人々に出会え濃密ではあったが、程よい距離を保ちつつ関係を持てたことは私にとって生涯の幸せであった。

この文章は『二松學舎大学附属図書館季報』第98号（平成28年12月発行）から転載しました。

二松學舎大学文学部卒業。同大学院文学研究科博士課程。平成14年博士（文学）。昭和49年4月二松學舎大学文学部着任。文学部・文学研究科教授。

松苓会各支部活動報告

〈出席・参加者欄は敬称略〉

北海道支部

◆支部新年会の開催

事務局長 山崎郁紀

札幌市の除雪予算196億円の半分を消化し、札幌市長をして「もはや災害」と言わしめた50年ぶりの大雪で明けた正月12日（木）、札幌駅内の中華料理店で9人の同窓を集めて開催されました。当日は最強寒波の到来で札幌も零下11度と凍れ、大荒れの天気が予想されたため稚内からの参加者の到着が危ぶまれましたがJRの乱れもなく無事開催できました。

昨夏の総会は台風の直撃を受け旭川、帯広からのJR・高速道路が不通となり、道東分会も道北分会も開催できず、異常気象にふり回されてきました。さて会



札幌市・香香厨房パセオ店にて

方の話題や、神奈川県出身者が3人もいたため県民性の話で盛り上がりしました。

参加者には例年どおり、おみやげとして今年の論語カレンダーが配られました。

〈参加者〉

佐々木伸（文74稚内）・永田哲之（文65伊達）・富永貴之（文65千歳）・工藤昌彦（文56小樽）・赤津博久（文54札幌）・安部初雄（文42石狩）・増井義昭（文39札幌）・山崎郁紀（文36札幌）・中紀義（文31札幌）

◆道南分会総会

事務局長 山崎郁紀

10月24日（土）風強く最高気温4度という非常に寒い日、函館市五稜郭の寿司の「谷ふじ」で開かれました。

函館は、外国人観光客や新幹線開通により本州からの観光客が増え、ホテルがとりづらく宿泊費も



函館市・五稜郭「ふじ」にて

数年前の20%値上りしていました。

総会では、それぞれの近況や、学生時代の話に花が咲きました。二次会は、函館駅前の大門のスナックを貸し切り、日本シリーズの北海道日本ハムファイターズを応援、その甲斐あって10年ぶりの日本一を祝うことができました。

〈参加者〉

田島基義（文38） 開原正信（文39）古賀俊治（文40） 吉川 肇（文59）吉川真理絵（文60） 以上函館小島政裕（文55） 松前増井義昭（文39） 山崎郁紀（文36）

北海道支部道東分会及び道北分会総会は、8月の3台風により、JR及び一般国道が不通となつていため今年度開催を見送っています。

◆支部報発行

○第54号 平成28年12月5日発行

・北海道支部総会開催しました！
・道南分会総会開催しました！！
・大学トップックス等
・平成28年新年会のお知らせ

岩手県支部

◆支部報発行

○第71号 平成28年10月9日発行

・駄々をこねられた話
○第72号 平成28年12月9日発行
・由利正宗の息子

秋田県支部

◆支部総会

支部長 三浦基

○平成28年8月20日（土）18:00から秋田駅前「和ごころ」で開催。

○当日は松苓会本部役員の新井喜義副会長にもお越しいただきました。

○出席者は、鈴木隆博（文54・熊谷禎子（文56）・三浦基（文41）と少々なかったのですが、支部の在り方や方向性について、具体的な見通しを持つことができたと思います。総会を、県北、中央、県南の各地区持ち回りで行う。

・文学散歩などの企画ものを取り入れる。現役の大学生にも声をかける。

・教員志望の学生や、地元に戻って働きたい学生にとって有益な情報交換の場にする。

・県内の学校で講師をしている先生を支援する立場にしたい。

・支部役員について
は改選は行わない。
特に、三浦支部長には次年度も引き続きお願

いする。
将来的には、支部長を鈴木



秋田市・和ごころにて

隆博先生へ引き継ぐ。

○支部総会への出席を促すことは大切なことだと考えています。

・二松學舎松苓会名簿（秋田県）記載には150名の会員がいる。

・葉書だけの案内の他に、互いに声を掛け合う。出席することで得られる情報。

・忘れていた学生時代の記憶が蘇る、世代を超えて共有できることの喜び。

○松苓会本部役員の新井喜義副会長を翌朝千秋公園へご案内。

・千秋公園のおすみやぐらから秋田を一望。

・写真がご趣味だということもあり、秋田の一コマをお持ち帰りいただいた。

・秋田県支部の新しい出発への期待を感じるとき。

○新井副会長からは、三浦支部長在任中に「支部報」発行を、秋田県支部に光が見えてきた、鈴木、熊谷先生も、やる気ですよ、と。

群馬県支部

◆支部総会 支部長 小石さち子

平成29年1月21日（土）太田ナウリリゾートホテルにて総会・新年会が開催されました。

支部長挨拶に始まり、小林公雄幹事長から来賓の祝辞を頂き、東京支部から参加して頂きました星野優子さん、大山由美子さんを紹介しまし

て、平成28年度事業報告・会計報告、平成29年度事業計画・予算案、会計監査報告、役員会での協議内容の報告、と滞り無く議事を終了しました。

その他の中で、新井喜義さんと深澤賢治さんを中心として、会員への広報紙「松苓群馬」第1号から45号の合冊本の作成、発行までして頂いた事への感謝と、また、西牧秀敏さんが、支部の活動をフェイスブックに掲載し効果を上げている事など報告されました。会員17名と計21名で和やかな雰囲気の中で会は進められました。

講演会では、須藤明実先生による「論語私感」『温故而知新』の思いを軸に」と題し研究内容が大変興味深く受講できました。

「孔子の温故は、仁の慈悲、慈恵。孔子の知新は、全ての徳を、「仁」を土台にさせたこと。「仁」とは思いやり、忠恕、全てへの愛。自分のためにも、人の為にも

労をおしまない。過去の事象、故事を研究し新義を知る。孔子は、君子の条件として、温故知新を扱っているところ、私



太田市・ナウリリゾートホテルにて

たちは心を寄せなければならぬと思います。」参加者からも、卒業後こんなに集中した講義はなかったと好評をいただきました。

また、支部事業として平成24年3月塚本忠男さんと宮森庸子さんが中心となり、「第1回群馬松苓会書展」出品者8名（中里昌之さん、深澤賢治さん、塚本忠男さん、高崎行彦さん、金澤正教さん、宮森庸子さん、篠原真美子さん、加藤敬子さん）30点余の作品と400人の来場者でスタートし、既に第5回まで開催する事が出来ました。6年前に二人で企画を始め同窓生に呼びかけ、鈴木利定さん他の協力者に恵まれて開催できた書展ですが、今後も同窓生の自己研鑽の場として、また、大学の広報活動の一助となるように継続できれば幸いです。

第6回群馬松苓会書展は、平成29年3月24日～29日まで高崎シティギヤラリーにおいて開催します。

総会出席者

講師 須藤明美（文40）

本部幹事長 小林公雄（文38）

東京支部副支部長 星野優子（文42）

同 大山由美子（文47）

中里昌之（文36）新井喜義（文37）

池田ふみ子（文37）深澤賢治（文37）

須田章七郎（文40）高橋慶一（文45）

小石さち子（文47）高柳 薫（文47）

都丸弥生（文47）松本茂治（文62）

佐藤 桂（文52）金田仁志（文53）

篠原真美子（文56）宮森庸子（文56）
林 恒徳（文60）西牧秀敏（文62）
大井田琴（文85）

支部報発行

○合冊本 平成28年5月1日発行
第1号～第45号（200頁）

埼玉県支部

支部長 町田哲夫

平成29年2月12日（日）午後1時より、東天紅大宮を会場に、平成28年度埼玉県支部総会・懇親会を開催しました。

当日は、大学より磯水絵副学長、松苓会本部より新井喜義副会長のご臨席をいただき、参加総数27名、今まで以上に和やかで賑わいのある会となりました。また今回は、東京都の矢澤喜成支部長、渡辺大雄幹事の参加もあり、他支部との交流の輪を広げる会となりました。

総会では、磯副学

長から、創立140年を迎える二松學舎の様々な取り組み（新学科の創設、漱石アンドロイドのお披露目とその反響、大



さいたま市・東天紅大宮店にて

学図書館蔵『奈良絵本』に関連した出版等）が紹介されました。漱石アンドロイドについては、多くの参加者が報道を見聞していて、関心の高さが感じられました。

支部の活動としては、昨年度施行された埼玉県支部規約に基づき役員8名が選出され、満場一致で承認されました。今後は、今まで以上に組織的な支部の運営が求められるとともに、期待も大きいと感じました。

第二部の懇親会では参加者全員の近況報告が行われ、終始和やかな雰囲気の中、次回の再会を互いに確認し、お開きとなりました。

今回の参加者は文学部38回卒から74回卒と昨年に続き幅広い層の会員の参加がありました。国際政治経済学部卒業生の参加については今後の大きな課題となりました。

埼玉県では、埼玉県教員の会が組織され、昨年12月3日に九段1号館で発会式が行われました。今後は、埼玉県教員の会と松苓会支部は互いに連携を図り、母校二松學舎大学の発展に熱い思いを持って寄与したいと考えます。

総会参加者は次の方々です。

■来賓

磯 水絵（二松學舎大学副学長）
新井喜義（二松學舎松苓会副会長）
矢澤喜成（松苓会東京支部長）
渡辺大雄（松苓会東京支部幹事）

■支部会員

小林公雄（文38） 木村誠次（文39）

東京都支部

◆女子会企画行事

支部長 矢澤喜成

平成28年11月27日（日）

鈴木優理子（文39） 中居功一（文39）
小林隆子（文40） 持田賢一（文40）
佐藤 修（文41） 福嶋辰美（文42）
本田和成（文42） 町田哲夫（文42）
町田芳子（文42） 五十嵐清（文44）
柴田京子（文45） 中山幸男（文46）
青木一弥（文47） 吉野昇之助（文47）
斎藤 淳（文51） 白井達男（文51）
千葉 昇（文53） 三好行雄（文53）
小西明德（文60） 田口博信（文63）
江原瑞貴（文74）

「東京湾クルーズとシャンパンゴールドに輝く丸の内散策」と銘打った第4回女子会企画行事である。正午に、ヴァンテアン号で、竹芝埠頭を出航。星野優子副支部長・女子会代表の挨拶、廣田克己松苓会長の乾杯の後、貸切の特別室の全面窓より東京湾を眺めつつ、鯛をメインディッシュとするフレンチコース（飲み放題付）を味わう。午後2時に帰港して、旧芝離宮恩賜庭園を散策。午後4時より、空が屋根の2階建てSKYBUSで、皇居・銀座・丸の内を巡る。そして、丸の内仲通りの二五〇本の街路樹を、LED百三万球でシャンパンゴールドに彩る、丸の内イルミネーションである。此の電飾は、今年「日本夜景遺産」に認

定された。小雨の中、二次会では、丸ビルにあるCITA・CITAより夜景を眺めつつアジアン料理を味わい、ゴージャスな企画は終了した。今回も、東武トップツアーズの山田浩次郎支店長（二松學舎大学附属高校出身）に色々と御世話になった。

〈参加者〉 30名

廣田克己（文38 神奈川）・新井喜義（文37 群馬） 小林公雄（文38 埼玉）
平野光治（文40 神奈川） 夫妻・久米路子（文73 埼玉）・毛塚梨花（大学入試課）・佐藤馨（政修5 神奈川）・持田賢一（文40 埼玉）

生垣しげ子（文38） 石塚法子（文38）
木内美知子（文39） 佐藤 修（文41）
星野優子（文42） 大山由美子（文47）
高柳幸雄（文49） 大淵俊明（文50）
片山聖英（文50） 野口明宏（文51）
野口悦子（文51） 菅原義博（文53）
中原敬二（文62）

この他関係者8名参加

◆支部報発行

○第61号 平成29年1月1日発行

・様々な出逢いと学ぶ喜び

・年頭所感 矢澤喜成
・女子会企画行事 顧問 井上和男

東京湾クルーズとシャンパンゴールドに輝く丸の内散策

参加して 星野優子・片山聖英
・長野県支部歴史散歩に参加して

・神奈川県支部総会報告
・千葉県支部総会報告

神奈川県支部

◆初秋の湯河原 文学・歴史探訪報告 県西地区担当 岩本明子

爽涼の11月6日、湯河原駅に集合し、今回の文学・歴史探訪がスタートしました。

『不動滝』夏目漱石「明暗」に登場し、吉井勇も「恋ぐさ」に文章を残した『不動滝』。早い時間であったこともあり、暫くは松苓会メンバーだけで最初の訪問地としてこのパワースポットを鑑賞いたしました。

『もみじ亭』昼食は奥湯河原の蕎麦屋を借り切り、頭から頂ける海老の天ぶら付きの天そばを多くの会員が堪能しました。

『加満田』湯河原にある文人宿。今までに水上勉、大岡昇平、吉行淳之介、尾崎士郎、幸田文、石原慎太郎、檀一雄、松本清張、獅子文六、石川達三ほか多くの文人に愛されてきた宿です。特に宇野千代が編集者として小林秀雄を『加満田』に缶詰にした。これが作家を缶詰にした最初で、小林は亡くなるまでこの宿を愛した



湯河原・加満田にて

といわれています。偶々、連泊のお客様がいなかったこともあり、執筆に使われた客室や露天風呂も見学させていただき、今回の訪問のために特に本田宗一郎からの手紙、小林秀雄、林芙美子、宇野千代の色紙、水上勉の弔辞、檀一雄、獅子文六、大岡昇平、船橋聖一の文章などを廊下に飾っていただき、ゆっくりと見学をさせていただきました。松苓会本部から新井喜義副会長、小林公雄幹事長、東京支部矢澤喜成支部長、星野優子副支部長をお迎えし、支部会員等12名を含め、16名の参加となりました。支部長挨拶後、新井副会長、矢澤支部長より、ご挨拶をいただきました。本部会長・支部顧問の廣田克己（前支部長）による乾杯後、料理を味わい、ご参加いただいた皆様からご挨拶並びに近況報告をいただきました。支部会員として廣田克己本部会長、藤井隆晴神奈川県教員の会副会長のご出席

『湯河原美術館』平松礼二、竹内栖鳳、安井曾太郎など湯河原ゆかりの美術作品を鑑賞しました。

『光風荘』2・26事件で東京以外の唯一の現場。昭和11年の早朝に起こったこの事件の背景、その後についても含め、ボランティアの説明を伺い、時を超えて当時に思いを寄せることができました。

『万葉公園前』楽しい時間は早いもの、名残を惜しみながら解散となりました。

参加の21名の皆様には当日の行き届きの点をご容赦頂くとともに、まだまだご案内しきれなかった湯河原を発見しに再来湯いただけただけ幸いです。最後にりましたが、田中憲明顧問には今回の文学・歴史探訪に多大なるご尽力をいただきました。おかげさまで参加者の方々と佳き一日を過ごすことができました。さらに支部長をはじめ今回の文学・

歴史探訪を支えてくださいました皆様に感謝を申しあげ報告といたします。

◆新年賀詞交歓会

支部長 平野光治

平成29年1月15日（日）鎌倉山下飯店にて、平成29年二松學舎松苓会神奈川支部賀詞交歓会が開催されました。松苓会本部から新井喜義副会長、小林公雄幹事長、東京支部矢澤喜成支部長、星野優子副支部長をお迎えし、支部会員等12名を含め、16名の参加となりました。支部長挨拶後、新井副会長、矢澤支部長より、ご挨拶をいただきました。本部会長・支部顧問の廣田克己（前支部長）による乾杯後、料理を味わい、ご参加いただいた皆様からご挨拶並びに近況報告をいただきました。支部会員として廣田克己本部会長、藤井隆晴神奈川県教員の会副会長のご出席



鎌倉市・山下飯店にて

会の言葉で引き締め、親睦を深めた賀詞交歓会となりました。開会前に鶴岡八幡宮に初詣を行い、新年の良いスタートを切ることが出来ました。ご出席の皆様から、神奈川支部活動へのご声援やご協力、ご助言をいただき、支部長としての責任の重さと諸事業への創意工夫の必要性、皆様への感謝の思いを強くいたしました。ご来賓並びにご参加いただきました皆様、会場等ご準備をいただいた前田明三浦地区長に深く感謝申し上げます。

参加者は次のとおり。

〈来賓〉

松苓会本部副会長 新井喜義
松苓会本部幹事長 小林公雄
東京支部支部長 矢澤喜成
東京支部副支部長 星野優子
〈会員等〉

廣田克己（文38） 藤井隆晴（文47）
中川俊一郎（文48） 中川順子（特）
前田 明（文48） 伊藤文雄（文45）
網野将美（文64） 外川ゆり子（特）
佐藤 馨（政修5） 三嶽道子（文39）
小林孝彰（文38） 平野光治（文40）

◆支部報発行

○第36号 平成28年11月5日発行

・第39回支部定期総会報告
・神奈川支部賀詞交歓会報告
・会員の近況
・世界遺産トイレ探索の旅「バルト三国とポーランド編」佐藤馨
・27年度決算・28年度予算
・27年度事業報告・28年度事業計画

長野県支部

・28文学歴史探訪・賀詞交歓会案内
「真田十萬石の城下町、信州松代を巡る」文学散歩

支部幹事

江村春彦

去る平成28年9月18日（日）、長野県支部恒例の文学散歩が行われました。当日は台風の影響から大雨になりましたが、NHKの大河ドラマ「真田丸」の影響で、松代は県内外からの多くの観光客で賑わっていました。参加者も、ドラマに登場する真田昌幸、信之、信繁（幸村）、小松姫など、そして佐久間象山も含めた魅力的な人物たちの「ホンモノ」に魅せられた機会になったように思いました。コースと参加者は後記のとおりです。

例年長野県支部の文学散歩は県内支部会員により行っており、廣田が、廣田松苓会長の提案、声掛けもあり、今年も県外から多くの参加者にご参加をいただき、たいへん活気のあるも



長野市・松代城にて

のになりました。また、県外からの旧友との再会のために懇親会にご参加いただいた会員もいらっしゃいました。支部活動の対象を県内だけでなく県外にも広げることによって、支部相互、会員相互の横のつながりが生まれることを教えていただきました。私にとってはまさに目からうろこが落ちるように感じた一日でした。同時に希望も生まれました。松苓会、大学との連携をさらに進めることによって、支部の活性化につなげていきたいと思っています。

来年度は、松苓会HPにてご案内をいたしますので、皆さまのご参加をお待ちしております。

〈コース〉

真田宝物館（NHK大河ドラマ特別展「真田丸」関連特別企画展）↓竹風堂（昼食）↓海津城（松代城）↓真田邸↓文武（ぶんぶ）学校↓象山（ぞうざん）神社↓象山（ぞうざん）記念館↓旧横田家住宅↓ホテル信濃路（懇親会）

〈参加者9名〉

廣田克巳（文38神奈川）・新井喜義（文37群馬）・小林公雄（文38埼玉）・矢澤喜成（文50東京）・持田賢一（文40埼玉）・関保典（文35）・清水登（文42）・山上和夫（文40）・江村春彦（文57）

静岡県支部

◆支部総会 支部長 永井陵次

期日 平成28年11月13日（日）

場所 ココチホテル沼津

参加者

来賓

新井喜義 松苓会副会長（文37）

平野光治 神奈川支部長（文40）

支部会員

神津賢一郎（文27）伊藤欣哉（文30）

望月隆延（文33）佐々木裕美（文45）

江本浩二（文51）高田潤一（文54）

永井陵次（文38）

静岡県支部総会は右記の期日、場所にて9名の参加者により、本年も開催することができた。例によって事業報告、会計報告などはできるだけ簡略に済ませ、後は参加者の近況報告、歓談で楽しく過した。支部長から、直前に参加した神奈川県支部の文学散歩の様子を披露すると、皆さん大変関心を持たれたよう



沼津市・ココチホテルにて

ものかと思った次第である。

会の終了後、地元の江本さんの案内でそのミニ散策に沼津市内へ出た。折から沼津市では「全国よさこい祭り」とかで、大変な賑いの中、旧沼津兵学校跡、狩野川水運の拠点跡などを見て回り、楽しい一日を過ごすことができた。

◆支部報発行

○平成28年9月1日発行

・二松學舎松苓会85周年記念

・27年度静岡県支部総会・懇親会

・コラム「もみじ踏みわけ①」

・返信ハガキの近況報告より

支部長 永井陵次

愛知県支部

◆支部総会

支部長 松田博文

さる9月24日（土曜日）に、昨年続き愛知県支部懇親会を、名古屋駅近くオステリア・ナルミツにおいて開催しました。

オリンピック

ック年毎の開催を決め、お忙しい中7名の会員に御参加いただき集いただきました。準備が遅く皆様に御迷惑をお掛けし



名古屋市・オステリア・ナルミツにて

ましたことを深くお詫び致します。

会は昨年同様、諸先輩方の懐かしい話や、オリンピックでの感動話、災害話等々あつという間に時が流れました。日常の中に細やかな幸せを見つけましょうという結びでお開きとなりました。

4年後に皆が元気に再会できることを祈念すると共に、会の維持を微力ながら尽くしていきたいと思います。

〈参加者〉

新海 守（文33）大塚和子（文44）

松田博文（文55）佐藤孝夫（文37）

新海 直（文59）野崎英夫（文40）

松田ゆかり（文55）

新潟県支部

◆支部総会

支部長 坂井福作

年末・年始に雪が降らず、暖冬かなと思っていました。一月半ばに寒気が入ると一面真っ白になりました。こちらが雪模様になると、東京は抜けるような青空が広がるという結果になります。同じ日本なのにとどうらめしくなります。

さて、2年ぶりに支部総会を開催致しました。前回は長岡市での開催でしたので、今回は新潟市に場所を移しての開催でした。この度は富樫信浩氏にご苦勞いただいたて、名簿の整理と発送並びに当日の設定をお願い致しました。

日時 平成28年10月8日(土) 11時
場所 ホテルサンルート新潟
(出席者)

渡辺和典(文36) 角谷輝彦(文39)
坂井福作(文42) 太田英則(文51)
富樫信浩(文52) 高橋周之(文57)
長井秀憲(文58) 阪本寛子(文65)
佐藤三芳(政経3)

総会に先立ち、物故者の皆様に黙
祷を捧げ、ご冥福をお祈りいたしま
した。支部長挨拶に続き、議事に移
り、会計報告・支部役員選出を審議
し、坂井支部長と太田副支部長の再
任が承認されました。最後に、元支
部長・村山定男氏のご逝去に伴い、
支部として弔意を表すことになりま
した。

総会後、場所を変えて懇親会に移
りました。富樫氏の司会のもと、自
己紹介から始めましたが、その中か
らいくつか紹介します。

・書道部の校外展は、私たちが始め
ました。

・あまり学
校の授業
にはでな
かったが、
なんとか
卒業させ
て頂いた。
・九段坂を
上り下り
して神田
の古本屋
街に行く



新潟市・ホテルサンルートにて

ことが楽しかったです。
バイトが忙しく、学校生活はあま
り印象に残っていません等々。

大学を九段校舎で過ごした者、柏
で学生生活を送った者、それぞれ世
代に違いはありますが、二松學舎と
いう縁で思い出を語り合う事が出来
ました。今回初めて国際政治経済学
部から参加していただき、和気藹々
のうちに時間が過ぎました。この輪を
さらに広げて、次回の総会に集まる
事を約束して散会しました。

宮崎県支部

◆支部総会

支部長 宮崎宣幸

平成28年度宮崎県支部総会は、小
林幹事長をお迎えして11月19日(土)
6時から、宮崎市内の「ゆい」とい
う会場で実施しました。当初8月下
旬を予定していましたが参加者が集
まらず急遽延期ということになりま
した。今回も5名の参加予定でした
が、1名仕事の都合で急遽欠席とな
り4名(44期の内村厚夫君、51期の
後藤祐子さん、62期の落合正樹君、
それに41期の私)と幹事長の計5名
で開催しました。最初に小林幹事長
から、総会の内容の詳しい説明があ
り、地方出身の学生の激減している
現状にどう対処していくかが大学だ
けでなく松苓会としても大きな課題
になっていくという話をされました。
た。大学としての新しい試みとして

100円朝食や夏目漱石のアンドロ
イドが12月に完成すること、3号館
4号館ができていて、今では九段で
学生は学んでいる事等の報告もあり
ました。附属柏高校の卒業生が芥川
賞をとったことも報告されました。
二松學舎大学の卒業で無いのが非常
に残念。

我々の時代(昭和40年代)は宮崎
県出身者だけで13名以上在学してい
たのが現在在学学生3名であることを
報告されると、尻すぼみになって近
い将来いなくなるのではないかと危
惧される。大学だけでなく我々も非
常に危機感を感じているが、さてで
はどうやって高校生を二松學舎に入
学させるか、推薦するか、というこ
とになると、目玉がない。昭和の時
代は1、授業料が安い(年6万)、
2、有名な教授陣が大勢いらっしや
った、3、入学すれば大抵の学生は
教員に採用された、という売りが、
あったが、

現在はその
が全て無く
なった(教
員採用につ
いては大学
側の非常な
努力でかろ
うじて面目
を施してい
るがそれも
昔ほどでは
ない)。大



宮崎市・「結い」にて

学側も文学部主体から、国際政治経
済学部の新設、そして今回は都市文
化デザイン学科の新設と、シフトを
変えつつあるように感じる。非常に
難しい現状である。

さて、親睦会に入り、酒間に参加
者の自己紹介及び近況報告を行い、
その後質問や職場での苦労話などが
あり、会話が盛り上がりました。会
員相互の親睦は結構はかれたのでは
ないかと思えます。次年度はもっと
参加者が増えるように、日時や会場
など検討していきたいと思えます。

松苓会本部役員の皆様には毎回の
成金やお祝金を頂きありがとうございます。
助かっています。

三重県支部

◆支部総会

事務局長 小川直紀

去る12月17日(土)午後6時より
会員の山口氏の「津ミートかしわ
ぎ」にて松
苓会三重県
支部「朋友
会」総会を
開催致しま
した。

引き続き
杉野茂先生
の研究者と
しての学究
生活をお伺
いし、懇親
会となりま



津市・「津ミートかしわぎ」にて

した。今回は斎藤拙堂顕彰会のことについてのお話があり、支部としての入会を決定しました。

以前は、総会以外に文学散歩を実施し、中江藤樹や郷土の本居宣長、佐佐木信綱等を訪ねる企画を実施してきましたが、ここ数年は総会時に会員所蔵の文物持参による講演やマジック等で相互研修の場を兼ねてきました。

支部総会の参加者は例年10名前後です。会員の近況報告や学生時代の話など懐かしく、また興味深い内容で話が弾みました。

支部出席者は次のとおりです。
写真後列右より

小川直紀(文44) 山口由香(文38)
前野克二(文37) 加藤武俊(文49)
納所佳子(文54) 竹嶋秀聡(文56)
前列右より
三林忠明(文34) 杉野 茂(専14)
稲垣武嗣(文33)

近畿連絡協議会

第69回松苓近畿互礼会

事務局長 齋藤 衛

人の世は、まさに奇跡と言っている。共に関心ある人生を創り互助共栄の中に命の大切さを悟し合う。二松學舎松苓会会員で近畿に在る者の集いは、まさに然るべき共生の最たるものです。

昭和23年8月15日に1期の先輩方

の先導にて
発足した近
畿支部は、
先輩の志を
継ぐにひと
ときの怠り
なく、今年
69回目の会
合を8名の
参加を得て
開催しまし
た。



大阪市・鳥よし本店にて

母 校 か
ら、大学副学長の高野和基先生、本部から山崎正伸副会長をお迎えして、2月4日(土)午後3時より大阪千日前鳥よし本店で開会。

この度のご案内で得ました計報、三重の杉野茂氏(専14)、大阪の石田嘉一郎氏(専19)、同 吉田多喜雄氏(文28)「ご三人の逝去に深く哀悼の念を捧げ開会する。齋藤事務局長の司会で進行し、ご挨拶に立った末吉代表は、共生の世は常に日進月歩の歩みを辿る。18歳人口の減少、地方大学の整備充実、衣食住の経済条件などなどで私学の存続危機が今を取り巻く世相となり、その中で母校への卒業生の案じる心は、会えば決まってこの話が生まれる。代表はこの行雲流水の理にあつて温故知新、不易流行の英知を互いに磨き合うことの、今は大切な時期でありましょうと結びました。

高野先生は、新しい学科の増設に

伴い、創立140年に向けての諸事業の報告と同窓各位の一層のご理解とご後援をいただきたい。と、山崎先生は、本部副会長として、同窓生の一段の親和と努力を一つに集め、母校の隆昌に寄与して参りたいと話される。出席者は順不同で、末吉榮三(専12)・辻一真(文39)・稲垣武嗣(文33)・武内昭徳(文47)・世古幸生(文44) 齋藤衛(文49)で、いつもよりややさびしい感があつた。それぞれの近況報告に共通してのことばは、「母校の隆昌」の五文字に尽きていた。母校のことは、常に心に生きている。

卒業生だより

軽音楽部同窓会

事務局長 高橋廣至

12月3日(土)午後2時より「ホテルグランドパレス」(飯田橋)にて、軽音楽部の同窓会を開催しました。とはいえ、創部以来の同窓会の開催は到底無理と考え、発起人が在籍していた昭和50年前後の所属部員限定での開催でした。

以前から仲間内では、「いつか軽音OB会をやりたいね」という話は出ていたのですが、当時、それぞれが働き盛りの時期と重なっていたこともあり、実行に移すことができませんでした。ところが、「あれから40年」の言葉のとおり、皆さん、退職や再就職の時期を迎えるにつけ、

あの若き青春の頃を懐かしむ気持ちが強くなってきたようです。

しかし、40年も経つとなかなか住所が分かりません。思案の末に母校(松苓会)に出かけ、同窓会名簿を拝見させていただき、何とか開催当日を迎えることができました。

案内文書には、「長い年月が経過しています。受付でしつかり名乗り、お互いを確認しましょう」を明記しましたが、まさに、「君の名は(?)」状態の人も多くいらっしゃいました。しかし、皆さんの人柄は昔のまま、直ぐに学生時代の先輩・後輩に戻り、心から楽しい時間を過ごすことができました。

開宴中、参加者20名に「二分半」の時間制限スピーチをお願いしました。皆さん最初は時間を守ってくれましたが、後半は酔いが回ったためか持ち時間を忘れた方が続出しました。やはり、40年間を一分半にまとめるというのは至難の業以上だったようです。

瞬く間の同窓会でありましたが、間違いなく青春の時間でもありました。参加者全員で名残を惜しみながらも、次回開催までの健康を固く固



ホテルグランドパレスにて

く約束しホテルを後にしました。
最後に事務局の総括ですが、「あれから40年」での開催は、やはり長過ぎました。これからは「あれから3年」の定期開催にしようと考えています。

空手部跡道部OB・OG会報告

神楽坂我ら集いて今宵また

二松跡道熱き血潮燃ゆ

古賀俊治（文40俳号：蜉蝣子）

日時 平成28年9月24日（土）17時
場所 神楽坂・個室居酒屋「司」
出席 20名

幹事を始めとして早めの参加者5名ほどに加え、定刻20分前ころから三々五々、参加者が増え始める。会は定刻よりやや遅れて始まる。西片和男幹事（文43）の開式の辞に続いて山口直道会長（文38）が挨拶の言葉を述べ、決算報告や予算案などが提案される。事務局提案の議題が承認されて総会は終わる。生ビールの乾杯で祝宴に入る。二松



神楽坂・「司」にて

學舎跡道部も、玄制流空手部として発足してから来年は50周年の節目を迎える。会の葉に記してある近況報告を見ながら、欠席者へも思いを馳せているうちに、二週間後の学生跡道大会に向けて稽古中の部員を指導している3名も駆け付ける。稽古に手応えを感じている様子だ。今度の大会では上位入賞が期待出来そうだと嬉しい報告もあり、賑やかさが倍加する。

出席者の顔ぶれは、北から南まで多岐に亘っている。広島在住のOBから、5月27日のオバマ大統領の広島訪問に関する話題が供された。広島市民の反応は、マスコミ報道とはかなり違っているように思えた。平和公園に持ち込まれた黒いアタッシュ・ケースに対する疑問、彼の演説を「核兵器無き世界を訴えた」というマスコミ。

また、サークル活動に対する大学側の対応が冷淡になっているとの話も出た。附属高校野球部育成方針で、大学のサークル活動がしわ寄せを受けているらしい。学業とサークル活動とは大学生生活の両輪だから、大学として大いにバックアップして欲しいものだ。

酌めど話は尽きせず、会は大いに盛り上がった。どうやら雨の気配は去り、明日は晴れそうだ。

会えばまた九段の青春甦り

話も弾む秋の神楽坂

45年ぶりのワンダーフォーゲル部の同窓会

菅原栄子（文41）

平成27年12月6日・7日、秋田県にかほ市象潟のたつみ寛洋ホテルで卒業後初めて、二松學舎大学ワンダーフォーゲル部の同窓会を開きました。集まったのは、にかほ市出身でこのホテルの経営者でもある佐藤（旧姓伊藤）寛さん（文38）、秋田県羽後町の佐藤仁さん（文39）、千葉県出身で退職後秋田県に移り住んだ片倉（旧姓鶴岡）俊秀さん（文41）、岩手県奥州市にお住いの高橋良光さん（文41）、そして宮城県に住み声がけとなった菅原（旧姓黒澤）栄子（文41）の5人。翌年10月30日・31日に行われた二回目には、はるばると長野県から小林澄光さん（文39）が加わり6人となりました。二回とも寛さん御夫妻には、丁寧なおもてなしを頂き感謝して居ります。

45年ぶりの

の再会でお互いに頭に白いものがまじり、体型も少し変化して「他所で会ったら多分わからないね。」と言う人もいました。長い歳月の



昭和44年・八ヶ岳山頂にて

生き方が白髪や皺や顔などに刻まれているのでしょうか。

とにかく生ビールで乾杯。温泉上りのビールは格別な味がしました。それぞれの人生を語りはじめ、私などは圧倒されてほとんど聞き役に回ること。山の話を聞きたいなと思っていましたら、佐藤仁さんが当時の写真を数葉持参してくれ、「二松學舎大学ワンダーフォーゲル部の旗」を掲げているものもありました。私達は貧乏学生の集まりでカメラを持っている人がいたとは思っていませんでしたので、私にとってのは幻の写真でとても懐しく感激しました。

ホテルの料理を美味しく御馳走になり、ビールもお酒も進みました。二次会で、又ゆっくり飲み直そうという事になり移動しました。話は尽きなくそのうちにある時間になると目を薬をさす人、薬を飲む人。持病とお付き合ひしながらもここまで生きて来たから再会できたのですね。至福の限りでした。

二松學舎大学は東京のど真ん中にあり、地方から出て行った私にとってはとてもまぶしかったもの



にかほ市・たつみ寛洋ホテルにて

です。すし詰めのレストランにも驚き苦勞しました。アルバイトも皆さんそれぞれにしていたが、そんな中で先輩が「山に登らないか」と声をかけて頂いた事は、私にとってこの上ない幸運でした。山登りは厳しいけれど都会生活のオアシスのようでした。バイトのお金が足りない時は我慢して、次回山行の為に遣り繰りもしました。

私が今でも感謝しきれないのは、全くの素人にもかかわらず、八ヶ岳縦走や白馬縦走、丹沢山などによく連れて行ってくれたということです。必死について行くばかりでしたが、結構危険な所もあり、天候の急変にも関わらず無事全員を下山させてくれました。感謝でいっぱいです。一回目の集まりの後、佐藤仁さんが「山賊」というワンゲル部の創刊号をコピーして送って下さり、写真とともに大学時代の宝物となっています。

初冬の夜訛そのまま山の友
みかん食み友の昔と学び舎と
日本酒の目減りしてゆく冬の宿

山崎ゼミ・ニグループで同窓会

大貫 正皓(文74)

私たちは、平成14年度に文学部国文学科に入学、3年次より山崎正伸先生のゼミに所属し、歌物語、私家集の演習を通し、文学研究の奥深さ、楽しさを教えていただきました。

私たちにとって山崎ゼミでの研究

の日々は、社会で生き、生活を充実させていこうとする営みの「礎」を学ばせてもらった日々のように、感じています。より正確で、魅力的な解釈を目指して——というように。



15期ゼミ会

共に「礎」を学び合ったみんなとは、久々の再会でも、すぐに打ち解けてしまします。特別な仲間たちなのだと実感します。

この日は、副ゼミ長の子育て話に花が咲きました。卒業から10年経った今も、山崎先生を囲み、昔のように楽しい時間を過ごすことができることを嬉しく思います。

染谷 恵美子(文69)

皆に誇れる山崎ゼミ、山崎正伸ゼミ、略して山伸ゼミの9期、10期、11期の有志が集まり、ゼミ会を定期的に開催しています。厳しいことで有名な山伸ゼミのゼミ生は毎年それほど多くはありません。しかし本当に勉強したいと願う人達の集まりでした。そして少数だったからこそ私達ゼミ生のつながりは強いものになりました。山伸ゼミに入った2年間はたくさんの方の学べたと感謝しています。学ぶことの楽しさを山伸ゼミがもう一度気づかせてくれたか

からです。当時、1ヶ月に1度か2度回ってくるレジュメ発表のために図書館に通いました。必ず同期や先輩、後輩がいるので孤独感はなく、助けられたり助けながら新古今和歌集の世界にどっぷりと浸かることのできた充実した時間でした。今でも調べるのが全く苦にならないのは、あの時、必要な記述を見つけたおかげです。7年前、山崎先生の還暦を祝う会でゼミ生が一堂に会しました。皆さん自信に満ちた生き方をされていて感動した記憶があります。嬉しくなった私は、幹事をされている先輩に「次は私が永久幹事となり皆様を召集します。」と宣言していました。

しかしなかなか行動に移せませんでした。したが、昨年やっと同期、先輩、後輩に声をかけ、9期10期11期のゼミ会が実現しました。9期以前の先輩も数名来てくださいました。会えばあの頃と変わらない優しく博学な山崎先生と、共に学んだ仲間との気が置けない楽しいゼミ会となりました。皆それぞれの道で活躍しており、誇らしい気持ちには益々強くなりました。

前回は6名、今回は8名が参加。次の目標は10人。最終目標はゼミ生に全員参加



9期～11期のゼミ会

してもらったことです。懸命に勉強した仲間と今と昔を語り、二松學舎で学べたことの誇りを取り戻せるゼミ会。山崎先生、永久幹事は私にお任せください。

第7回緑友会(旧松吟会)の集い

平成28年

11月19日

(土) 21

日(月) 二

泊三日で、

熱海、伊豆

大島、小田

原城と楽しく開催を

しました。

学生時代

を懐かし

み、話はピストル玉の様に後から後

から皆二十代の顔になって今の年を

忘れたかの様でした。

又二年後元気で「会いましょ

う!!」と約束を交わし、別れを惜

しみました。

いつもは10人以上集まりますが、

今回は次の9人でした。

亀谷昌吾(文36) 福原路子(文36)

橋口正司(文37) 上田善達(文38)

小木 学(文38) 米田惇子(文38)

権正滋子(文39) 鈴木優理子(文39)

八木橋美雪(文39)

次の平成31年は、種子島を予定し

ています。

(幹事 八木橋美雪・鈴木優理子)



小田原城にて

活躍する卒業生

今回は西日本新聞に掲載された阿部誠文氏(文36・10月4日掲載)・永淵道彦氏(文36・2月6日掲載)を紹介します。

人物
現在形

台湾、朝鮮半島、満洲(現中国東北部)。戦前、日本はアジア各地を勢力下に置き、数多くの日本人が海を渡った。人の暮らすところ、文学が生まれる。だが戦後70年余り、それら「外地文学」は歴史に埋もれようとしている。俳人・元九州女子大教授の阿部誠文さん(73)は九州市に半世紀にわたり、外地で詠まれた俳句を収集し、著書にまとめた。その営みは、外地に生まれた文学の「花」を次代へつなぐとする俳人の執念すら感じさせる。

従軍・外地俳句集め著作に

俳人 阿部誠文さん

7月刊行の著書「満洲・中国俳壇」と作品「三木城」は、大正期から敗戦まで満洲や中国で作句した有名無名の俳人36人を紹介している。残された句集から阿部さんが佳句、秀句を厳選。その数々千句を超える。俳人それぞれを丁寧に読み解いている。〈大空につらなりたる枯野かな〉(三木城)〈東海や怒濤の起伏なき花かな〉(江川三昧)〈花びらの吹かれて風の牡丹かな〉(三木城)果てなく続く平原、天を覆い吹き付ける黄砂、海や大河や大地も凍る酷寒。過酷な環境でも生命の営み続ける花や鳥。俳人たちはあるものを



20歳で資料を集め始めた頃の使命感は今も変わらないという阿部誠文さん。「仕事が終わる前に、自分の命が終わるそうです」

外地文学の「花」
消さないために

あるがままに、自分の目に見える見方で詠んだ。その視線はそこに生きる庶民にも注がれる。〈花柳樹みし児が泣く声かきり〉(志和史)〈移民あはれみらぬ稲穂を刈りいそぐ〉(久米幸義)渡海の経緯はさまざまだが、大陸を「終の地」とする思いを強くする。〈満洲に果つべきいのち冬を弾く2人連れの傷痍軍人を見掛けた。道行く人々は誰も彼らを顧みない。阿部さんは彼らに話しかけた。60年安保闘争の余韻もさめやめ時代。2人は「平和を叫ぶ彼らより、戦争の悲惨さを知っているのは私たちだ」と語った。同じ頃、古書店で従軍兵士の小さな句集を手に入れた。これを「戦争を体験した者の作品でなければ、本当の戦争は語れない。実態を知るのには逃げるを棄つた悲劇をも俳人たちは詠んだ。追われゆく棄民に残響の土ほこり」(不鮮青蛙)〈子等埋めし丘こそこゝで凍て果つる〉(天川悦子)阿部さんは北海道の開拓者の子に生まれた。電気もガスも水道もない山中から1964年、詩人を志し、大学進学のため上京した。大学近くでアコーディオンを弾く2人連れの傷痍軍人を見掛けた。道行く人々は誰も彼らを顧みない。阿部さんは彼らに話しかけた。60年安保闘争の余韻もさめやめ時代。2人は「平和を叫ぶ彼らより、戦争の悲惨さを知っているのは私たちだ」と語った。同じ頃、古書店で従軍兵士の小さな句集を手に入れた。これを「戦争を体験した者の作品でなければ、本当の戦争は語れない。実態を知るのには逃げるを棄つた悲劇をも俳人たちは詠んだ。追われゆく棄民に残響の土ほこり」(不鮮青蛙)〈子等埋めし丘こそこゝで凍て果つる〉(天川悦子)阿部さんは北海道の開拓者の子に生まれた。電気もガスも水道もない山中から1964年、詩人を志し、大学進学のため上京した。大学近くでアコーディオンを弾く2人連れの傷痍軍人を見掛けた。道行く人々は誰も彼らを顧みない。阿部さんは彼らに話しかけた。60年安保闘争の余韻もさめやめ時代。2人は「平和を叫ぶ彼らより、戦争の悲惨さを知っているのは私たちだ」と語った。同じ頃、古書店で従軍兵士の小さな句集を手に入れた。これを「戦争を体験した者の作品でなければ、本当の戦争は語れない。実態を知るのには逃げるを棄つた悲劇をも俳人たちは詠んだ。追われゆく棄民に残響の土ほこり」(不鮮青蛙)〈子等埋めし丘こそこゝで凍て果つる〉(天川悦子)

資料を集め始めて53年。「外地文学には外地でしか咲き得ない花がある。命のこゝろひのよに咲いた花のかげんさ」は、この上ないもの。外地文学の研究を書いても読者は少ない。だが書かなければ外地文学の「花」は歴史の中に消える。まだ著書にまとめていない資料は段ボール箱に5箱分ある。「自分のほか誰もやる人はいない。体が動く限り続けたい」(江藤俊哉)

人物
現在形

豊島与志雄「童話選集」刊行に取り組む 永淵道彦さん



30歳の頃の豊島与志雄

生きる意欲
その源泉としての
古里の自然の力

「豊島与志雄童話選集」刊行に取り組む永淵道彦さん。2013年には、福岡県筑紫野市に「福岡二日市文学館」を設立し、豊島の作品を展示している

大正期から戦後にかけて活躍した福岡県筑紫野出身の作家、豊島与志雄(1880-1950)。その文筆には小説やミゼラブルなどの翻訳のほか、100編に及ぶ童話作品がある。約40年にわたる、豊島文学の研究を続ける筑紫野大学名誉教授の永淵道彦さん(70)は「同県筑紫野市IIが豊島の「童話選集」刊行に取り組んでいる。豊島の文学者としての神髄はむしろ童話作品にくみ取れる。『与志雄童話』の総体を俯瞰する選集をまとめた」と意気込む。

野にうつろい小川が流れてゐました」(「天狗笑」)と評される。永淵さんは豊島文学を「文章は平易だが、述べられる意図はつかまえない、難解としがちなもの。ここにひかれる」と語る。永淵さんは大学や大学院でフランスの詩人ランボオの翻訳も手掛けた小林秀雄の研究に取り組んだ。その後、福岡県内の高校で国語教師を務める傍ら、九州大学で学び、孤獨の影を引きずる。永淵さんは、その影を「作者豊島の投影ではないか」と見る。永淵さんは、父が三木黒田家の当主の落胤だったという出生の深淵があり、さらに大学卒業前後には生家が多額の負債を抱えて没落した。その「深い暗部」を打破したのは、幼少期を過ごした小限の「自然の力」だった。「豊島は人々に生きる意欲を持つことを絶えず主張した。その意欲の源泉として豊か自然が必要であることを説いてやまなかった」

豊島作品は「著作集」(全6巻)が刊行されているものの、童話は収録されていない。そこで永淵さんは2012年、「童話選集」の自主制作に踏み切った。これまで6巻各100冊を製本。発表順に計60編を取り、解説を加えている。今後も年々巻のペースで刊行し、最終的には「十数巻に及ぶ」と思っている。現在是非売品だが、全巻がそろったところで研究者や図書館などに寄贈する予定。出版社にも出版を働き掛けている。永淵文学の研究課題はまだ多い。後続の研究者のため、体の動く限り、研究の土台をつくりたい」(江藤俊哉)

都市文化デザイン学科カリキュラム表

カリキュラム(合計124単位)		1年次	2年次	3年次	4年次
総合科目(12単位)		教養や語学力を高めるための科目群で大学共通科目です。			
文学部 共通科目 (14単位)	必須科目	基礎ゼミナール 文学入門A・B 漢字と文章表現A・B		都市文化デザイン学科に新規に開講する授業科目。同学科の学生は、この表に記載の科目のほか、自身の専攻等に応じて文学部国文学科・中国文学学科に開講されている科目も履修できる。	
	選択科目	人文学とビジネスデザイン 人文学と教育 人文学とコミュニケーション			
学科 共通科目 (24単位)	必須科目	都市文化デザイン学入門 異文化コミュニケーション入門 ポピュラーカルチャー入門 クリエイティブ概論 アートビジネス概論 メディア学概論 記号学概論 観光社会学概論			
		選択科目	現代日本文化概論A・B 地域社会文化概論A・B		
	英語で学ぶフランス語 英語で学ぶ中国語				
専攻科目 (32単位)		地域ブランディング論 建築デザイン論 編集デザイン論 映像表現文化論 広告表現文化論 放送・マスコミ文化論 環境文学論 都市文化文献講読		ブランディング・リテラシー演習 エディティング・リテラシー演習 フォーミング・リテラシー演習 都市文化デザイン学研究 コミュニケーションデザイン研究 ゲーム表現文化研究 マンガ表現文化研究 アニメ表現文化研究 多文化共生論特殊研究 都市文学特殊研究 江戸東京文化特殊研究 消費文化産業特殊研究	
				東アジア都市文化フィールドワーク①② 欧米都市文化フィールドワーク①②	
自由選択科目 (28単位)	必要単位数を越えて科目を取得することや、他学部他学科他専攻などの科目を履修することができます。			日本文学講読A・B～⑪A・B 比較文学講義A・B	
ゼミナール(8単位)				ゼミナールⅠ	ゼミナールⅡ
卒業研究(6単位)				卒業研究	

大学だより

都市文化デザイン学科

平成29年4月、文学部に新たに「都市文化デザイン学科」が誕生します。

近年の各種メディアの進化や新たなツールの創出等により表現方法の多様化が進み、コミュニケーションの方法も多岐にわたってきました。こうした新たな時代にはそれに相応した適切な情報発信が必要であり、これに対応する表現力や情報発信力を備えた人材の育成が求められます。

また、我が国は現在、観光地・文化発信地として改めて世界から注目されています。従来の

文学や文化等の理解はもとより、「クールジャパン」と称されるものの一つでもある、マンガ・アニメ・ゲーム等が集結する秋葉原に代表される独特の文化など、昨今の都市や地域で形成される新たな文化社会（都市文化社会）を理解することなく今後の日本を語ることはできません。

こうした状況を鑑み、これまで国文学科と中国文学科で培ってきた日本や東アジアの文学・文化についての知見等を基盤に、文芸文化や都市文化社会に関する表現力と発信力を持ち、新たな文化の再編創出への意欲やICTを駆使した情報発信のスキルを持ち合わせたコミュニケーション能力の高い人材を育成するため「都市文化デザイン学科」を設置することとしました。

詳しくは、本学ホームページを御覧ください。

卒業生名刺交換会開催！

平成29年2月25日、九段下駅近くのホテルグランドパレスにおいて、昨年度に続いて2回目となる卒業生名刺交換会が行われた。今年度から、大学と松苓会との共催により開催された。文学部卒業生が37名、国際政治経済学部卒業生が18名参加した。松苓会からは、廣田会長はじめ、本部三役と関東地区



の支部長が出席、大学教職員を含め、総勢約100名。

在學生も参加し、今後の就職活動に生かせる機会となった。また、卒業生にとっても、旧交をあたためるとともに、異業種の情報交換の場となり、交流を通して今後仕事にも生かせる大変有意義な会になった。



— 創立140周年記念 —

二松學舎大学のお宝展

2017年3月10日(金)～12日(日)

於 三省堂書店神保町本店 8Fイベントスペース

10:00～20:00 (※最終日は17:00まで)

絵で見る武士たちの世界



近現代作家の草稿展示

- 横溝 史「八つ墓村」
- 宮行津之介「カストリ」
- 水上 瀧「うるし塗の砥」
- 寺山 修司「時間よ止まれ、きみは悪魔だ」

二松學舎関連グッズ販売！

- 村田夢音「松風」
- 二松學舎オリジナル菓子
- 鳥巻の糸車で作ったブックカバー
- 激石タロウ
- 教職員関連書籍

来場者プレゼント (先着100名限りまで)

- 城崎堂クリアファイル
- ポストカードセット (鳥巻絵巻・新古今和歌集)

『武士が活躍しはじめた、その頃のお話。』

ISBN 978-4-16-760000-0 定価 1,500円(税別) A4判・上装 60頁

二松學舎大学附属図書館蔵 奈良絵本
『保元物語』『平治物語』『成吉思汗』



出版記念 原本展示!!

公開講座 & 講演

3月10日(金)

● 二松學舎大学公開講座「武士の時代」(10:00～)

「中世の貴族—平家源の戦い—」

「平安朝の武士—武士の時代—」

「鎌倉の武士—武士の時代—」

● 二松學舎大学公開講座「武士の時代」(10:00～)

「武士の時代—武士の時代—」

「武士の時代—武士の時代—」

3月11日(土)

● 二松學舎大学公開講座「武士の時代」(10:00～)

「武士の時代—武士の時代—」

「武士の時代—武士の時代—」

創立 140 周年記念お宝展開催

教職支援センターから

卒業生現職教員による埼玉県 教員の会が発足しました

昨年12月3日(土)、埼玉県内に勤務する二松學舎大学卒業の現職教員による、「埼玉県教員の会」の設立総会が九段校舎1号館を会場として開催された。これまで、茨城県と神奈川県との2県で同様の会が発足しており、卒業生教員による運営のものと会員の研修や親睦、大学と連携した行事、教員志望の現役学生との交流が行われている。

これに埼玉県が加わったことで卒業生教員間の情報網が一層整い、卒業生教員と母校との繋がりが強化さ

れることが期待される。総会では会長に選出された青木一弥氏(文47)をはじめ役員となった諸氏の挨拶に続いて、来賓として招かれていた磯水絵二松學舎大学副学長から祝辞が述べられ閉会となった。

総会当日は、吉崎一衛二松學舎大学名誉教授による『漱石と子規―その贈答詩をよむ―』と題し記念講演も行われ聴講者に好評を得た。その後、13階のラウンジへ場所を移して懇親会が催され、旧交を温める、あるいは世代を越えた新たな交流が始まる場となり、大いに盛会となった。



総会



講演会



懇親会

「第22回二松學舎大学教育研究 大会」を九段校舎で開催

昨年9月25日(日)、通算22回となる平成28年度「二松學舎大学教育研究大会」が大学九段校舎1号館で開催された。この研究大会は、本学卒業教員の研究発表や情報交換の場として活用されている。

今年度、第1部の全体講演会は、二松學舎大学文学部の山崎正伸教授に「婚姻制度から見た『大和物語』と『源氏物語』の演題で」登壇頂き、会場には配付された豊富な資料を手元に置き熱心に聞き入る姿が多くみられた。第2部の分科会では、特別支援教育部会・中学校部会・高等学校部会の校種別に3会場に分かれて開催し、活発な意見交換がなされた。分科会提案者は、特別支援教育の部が千葉県立野田特別支援学校の嶋田



中学校部会



特別支援教育部会



高等学校部会



全体講演会

克巳教頭、中学校の部が茨城県立古河中等教育学校の石塚照美教諭、高等学校の部が神奈川県立座間総合高等学校の山口正樹副校長であった。

松苓会の歩み(8)

昭和14年の松苓会名簿



昭和14年の松苓会名簿

転居・転職・改姓届用紙
訂正控用紙

今回は、最初に、『85周年記念誌』刊行後に見つかった新資料を紹介する。今回見つかった資料は、松苓会として初めて発行した名簿である。

○『昭和十四年七月現在 松苓会 會員名簿 二松學舎専門學校松苓會』(11×14.7cm 縦書74頁)この名簿には「昭和十四年六月現在 松友會會員名簿」(29頁)を併載している。

目次は、次のとおりである。

松苓会役員 会長・副会長・顧問・幹事・委員

賛助会員(現職員)

応召出征者報告

正会員(第1回卒から第9回卒まで収録)

索引(附) 現住所不明

会則(昭和14年5月修正の会則

を掲載)

当時の松苓会長は山田準、副会長は那智佐伝、顧問に國分三亥、佐倉孫三、小豆澤英男、橘純一、今欣吾。「応召出征者報告」には、外地(中支、満州など)、内地に分け、第1回生3人、第2回生1人、第3回生6人、4回生4人、5回生5人、6回生13人、7回生11人、8回生10人の合計53人(外地27人、内地26人)の氏名と所属部隊名が記されている。

「編集後記」は次のとおり。

○昨年のお約束通り名簿を作り得たことを諸君と共に喜びたい。松友会と合同になった結果特に在校生の便利は大きいと思ふ。

○然し本部宛の通信は皆無と言ってよく、山田校長及び今主事に私信を提供して戴いて訂正したと言ふ苦しみ方であった。

○年々不明の分が多くなるやうでは名簿の価値も低下し、会の発展にも支障が出来るわけで是非とも会員諸氏の御協力に依つてより完全にして行きたいと思ふ。

○そこで添附のハガキを御利用下さい。(他の用事と一緒に送られる恐

れがあります)氏名の読みにくいものには振仮名を願います。又名簿に誤謬を発見された方は早速御通知下さい。

○原籍は時によって役に立たないと思ひますから現住所を、又後輩の為に就職先をお知らせください。名簿係

「奥付」は、

昭和十四年七月五日印刷

昭和十四年七月八日発行

編輯兼発行者

東京市麹(町)区三番町六番地一六

二松學舎専門學校松苓會

右代表者 石川梅次郎

併載の「松友会名簿」をみると、第1学年に現松苓会顧問の末吉榮三氏、第2学年に後に学長となる佐古純一郎、理事長となる小池良雄、第3学年には、教授となる貴志(旧姓廣田)正造の氏名が見える。

松友会名簿の「編集後記」には、○本年より松苓会名簿と合併編輯した。会員相互の連絡に好都合の事と思ふ。○松苓会委員の方より右の合併案を出されたが、松友会として先輩各位よりの好意に感謝しなければならぬ。○名簿作成に関して松苓会委員の方殊に今主事大堀先輩の御世話になった。ここに深く感謝の意を表する次第である。(以下略)

池田松郎・小池良雄会長時代

昭和30年の二松學舎騒動から経営を立て直し、二松學舎中興の祖(『茯苓』第4号には、下河部元会長が「五十年の因と縁」の中で、「荒廢した学舎内外の整地作業は意外に難航を極めたが、浦野現理事長の寢食を忘れての東奔西走、捨身の精神行動が遂に浮かぶ瀬もあれで、ここに新生二松學舎が誕生したのである。(中略)浦野理事長なかりせば、現在の二松學舎はあり得なかつた。中興の祖—それは浦野匡彦先生である」と記している。)とされる浦野匡彦理事長・学長・松苓会長が昭和61年12月に逝去されたのをうけて、昭和62年3月の幹事会で池田松郎理事長が第6代松苓会長に就任する。あたかもこの年は二松學舎創立110周年にあたる。同年12月1日に創刊された「松苓会報」に池田会長の創刊の辞が掲載されている。

「(前略)今年創立百十周年を迎え、昨年十二月浦野理事長の急



『松苓会報』創刊号

逝という誠に悲しみに堪えない事があったのであるが関係者の努力により記念事業の計画は着実に実施されつつあることは誠に心強い次第である。松苓会においても浦野匡彦像の建立、頌徳碑、詩碑の建立、浦野匡彦言論集の出版等の創立百十周年を記念する事業が既に完成の域に達していることは御同慶の至りであります。加之予ねて皆さんの要望のあった松苓会報の第一号が発行される運びになったことは今後卒業生と母校との結びつき、会員相互の親睦の為に何よりも喜ばしいことであります。今後第二号から二松學舎の存続する限り逐次発行してゆく計画であります。何卒今後会員諸兄姉におかれても会報発行に御援助御協力を賜り、より有効に御利用を願ひ本部との御連絡はもとより会員の間のコミュニケーションの輪が少しでも広がることとなるならば誠に幸いである。」

池田会長、小池幹事長（後に池田会長のあとを受けて第7代松苓会長に就任）体制のもとで、前記『松苓会報』が創刊された。また、松苓会則に基づく「松苓会会務処理規程」（昭和62年4月1日施行）を制定して、常任幹事会、幹事会の役割を明確化した。それまで学内教職員が中心だった幹事に地区代表（北海道・

東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州・沖縄の九地区代表）を加え、幹事会を実質的な審議機関として位置づけ、組織の再構築を図った。池田会長（理事長）は、昭和63年8月末で理事長を退かれ、9月1日に小池良雄理事長が誕生する。9月15日には松苓会の幹事会・支部長会議が開催され、小池理事長が松苓会長に就任する。当時の学長は佐古純一郎先生。

小池新会長の就任の辞は、松苓会報第2号に掲載されている。

理事長就任の挨拶に続けて、「松苓会が本部活動を行うことが出来るようになったのは、池田前理事長が会長になられてからのことである。年間数百万円のわずかな予算ではあるが、松苓会報の発刊、全国支部長会議の開催等が可能となり、本部と支部との交流が活発に行われるようになった。来年度からは支部活動に援助するため、支部報発刊に対して若干の助成金を支出することも企画されている。松苓会の活動を活性化することが出来たのは、小林（日出夫）副会長、下河部（得三）神奈川支部長の支援と、杉村（正夫）事務局長等、皆様の努力と協力を得ることが出来た結果であることを報告し、感謝の意を表する次第である。」小池会長は、平成3年7月の幹事会で会長に下河部得三氏が選任され

るまで、会長を務められた。

（文責 小林公雄）



昭和62年7月の支部長会議

資料提供のお願い

松苓会では、継続して資料を収集しています。特に次の資料をお持ちの方は、ご一報ください。

- ・機関誌『松苓』創刊号、第5～8号
- ・松苓会名簿 昭和16年以降昭和30年代までに発行されたもの
- ・松苓会会則資料

・松苓会活動（本部）に関する資料、支部活動に関する資料（支部報など）、同期会、クラブ等のOB会などの資料、写真、専門学校時代、昭和20年、30年代の写真、卒業アルバムなど

百円朝食利用学生にアンケート実施

基本問題検討委員会では在学生の松苓会における位置づけを検討している。その一環として、在学生の松苓会に関する認識の現状を把握するため、百円朝食利用学生にアンケートを実施した。

実施日 平成29年1月16日～20日
回答数 87名（1年次生～大学院生）

1. 松苓会（大学同窓会組織）があることを知っていますか。
ア 知っている 69名 イ 知らない 15名
2. 松苓会本部の事業内容を知っていますか。
ア 知っている 6名 イ 知らない 78名
3. 松苓会には本部（大学内）と支部（各都道府県）があることを知っていますか。
ア 知っている 42名 イ 知らない 41名
4. 松苓会に会費（本部及び支部）が必要であることを知っていますか。
ア 知っている 15名 イ 少し知っている 30名 ウ 知らない 36名
5. 貴方の出身都道府県の松苓会支部の事業内容を知っていますか。
ア 知っている 0名 イ 少し知っている 12名 ウ 知らない 73名
6. 九段校舎1号館に松苓会本部が入っている松苓会室があることを知っていますか。
ア 知っている 30名 イ 知らない 54名
7. 食堂の入り口近くに松苓会のパンフレットスタンドがあることを知っていますか。
ア 知っている 41名 イ 知らない 40名
8. 松苓会のパンフレットスタンドにある会報や支部報を利用したことがありますか。
ア 利用したことがある 9名 イ 利用したことはない 76名
9. 松苓会本部や支部に望むことがありましたら、その内容を自由に書いてください。
10. その他松苓会について疑問・意見等がありましたら自由に書いてください。

自由記述では、百円朝食提供に対するお礼、給付型奨学金の充実、若手が活動しているところをアピールしてほしい、先輩が年齢が離れすぎている。支部がなにをしているかわかりにくい、宣伝してほしい。会費を少し下げしてほしい。パンフレットスタンドの増設などの要望があった。

松苓会本部では、毎年新入生のガイダンス時に松苓会の説明と会報の配布（会報は1年次と4年次生に配布）を行っている。アンケート結果は、今後の在学生に対する広報のあり方、松苓会事業検討に活用する。

あゝ頃の学生部・教務部

小林公雄（文38）

現在の13階建九段校舎の前の5階建て校舎は、昭和41年4月に入学した当時は、まだ完成しておらず、4月には途中まで出来ていた5階建て校舎と中庭を挟んだ木造校舎（2階建）の両方を使って授業が行われた。8月には新校舎は竣工（10月11日に校舎落成祝賀会が開催されたとの記録がある）し、後期からはすべての授業が5階建て校舎で行われた。その5階建て校舎の1階に学生部、教務部の事務室が設けられていた。

私は、昭和41年に入学し、昭和45年3月に卒業した。在学中に何度か窓口に向いたと思うが、学生課、教務課の区別もつかず、また当時勤めていた職員の記憶はほとんどない。

大学卒業と同時に母校に勤務し、学生部学生課所属となった。最初の1年間は、2階の学生相談室勤務で主に就職関連業務を行い、2年目から1階の事務室に移り入試業務担当となった。



工事中の5階建て校舎（昭和39年10月）

当時の事務組織は、管理部門の総務部（庶務課・経理課）、



昭和45年度学生手帳

教務部（教務課）と附属図書館である。昭和45年当時の学生課、教務課の業務内容は、今とほとんど変わっていないと思うが、手元に当時の『学生手帳』があるので、それを記して置く。（在学中の『学生手帳』の表紙裏には「学生は、常に下記の品を携帯すること」として、「1. 学生証 2. 印鑑 3. ペン」と記されていたのが懐かしい。昭和45年度版には、その記載がない。）

「学生課は学生の入学・退学・厚生指導・宿舍・就職・福利施設・保健衛生・生活指導・奨学金・課外活動・学生相談・諸届・諸証明書等の受付・発行等に関する業務を行う」とある。

また「教務課は学生の学籍・成績・講座の履修・定期試験・追試験・教育実習・研究活動・夏期公開講座・諸証明書の発行・卒業証書の授与・教育職員免許状の申請等に関する業務を行う」。

1階の事務室は、学生対応のカウンター越しに右側が学生課、左側が教務課で、事務室の奥に教務部長・学生部長の席があった。別に正面玄関を入って1階廊下を挟んで衛生室隣に部長室があったが、普段は応接

室として使用していた。事務室の隣は印刷室で、なぜか当時の事務職員は白衣を着ていた。

当時の大学を取りまく状況は昭和43年1月に東大医学部に端を発する東大紛争が起こり、学生運動が活発化していく。紛争は全国の大学に波及し、100を超える大学で何らかの紛争が発生していたという。昭和44年には東京大学安田講堂の学生封鎖を解除するため機動隊が出動する。また、お茶の水駅周辺での街頭バリケード闘争などがあり、4月には沖縄反戦デー。文部省は、多発する大学紛争の対策として「大学の運営に関する臨時措置法」を施行する。昭和45年には日航機よど号ハイジャック事件、そして6月の日米安全保障条約の自動延長を迎える。

大学紛争の波は本学にも押寄せており、昭和45年には、授業は平常どおり行われていたが、その後学生の階段閉鎖の実力行使等もあり、緊迫した空気もあった。505教室で行われた学

生自治会との話し合い（学生側は団体交渉と称していたが）には、

柴田周蔵学生部長が対応されたが、就職1年目の小生が、柴田部長



昭和45年の学生部

にお茶の差し入れに向かったことなどを思い出す。

昭和45年度の学生部学生課は、柴田周蔵学生部長、広田泰一課長、菅根順之課長補佐、三浦忠臣、新貝勝保、山岸英毅、大沼秀紀、吉岡瑞枝の各氏と小林であった。教務部教務課は、石川梅次郎教務部長、橋本栄治課長、藤森重紀、野口徳幸、石崎俊明、椎木伸治、平井志津江、藤井則子、牧和子、杉本良子の各氏である。翌年には、石川梅次郎教務部長が図書館長となり、柴田学生部長が教務部長を兼ね、学生課（この年度から1課、2課に分かれ、2課長は菅根順之先生）に佐藤正機、三浦忠幸の両氏が、教務課に百瀬寛海、田村喜美栄の各氏が入ってくる。

5階建て校舎竣工後は、木造校舎はクラブ活動の部室として使用され、その後、昭和53年3月に中庭・木造校舎の跡地に100周年第1記念館とクラブ棟が竣工する。

2階の学生相談室は、後に就職課となり、平成5年には就職部、そして現在のキャリアセンターとなっている。一方、入試業務は、その後教務課の所掌を経て入試課となっていく。



昭和45年の教務部

会員の便り

名誉教授 松本寧至

松苓会報拝受しました。「大学図書館の今昔」を拝見し大変懐かしく思いました。以前とは違つてすっきりきれいになったことと思います。が、嬉しく思いました。益々の充実とご発展を祈ります。ホームカミングデーも盛会になることを念じております。

金輪末良 (文25)

二松學舎の皆様、松苓会創設85周年記念式典おめでとございます。松苓会報を頂き誠に嬉しく拝見いたしました。大学発展の姿素晴らしいと思います。私は残念ながら入院生活を送っております。残念に思います。少しづつ快方に向かつております。現在は、心より二松學舎の発展を祈っております。いつまでも、二松學舎が発展いたしますよう、どうか頑張ってください。私も頑張ります。

鈴木誠也選手に声援を!!

平岡才二郎 (文26)

松苓会のますますの発展を祈ります。プロ野球の世界的試合(侍ジャパン対メキシコ)に二松學舎大学附属高校出身の選手が一人選出されて出場していますことをご連絡させて頂きます。彼の名前は鈴木誠也。広

島カープから選ばれました。皆様にお知らせください。(広島県支部長)

「田中伸ゼミ」の名簿作成にご協力を

廣田克己 (文38 田中ゼミ2回)

二松學舎大学卒業生による同期会・ゼミ会サークル会の結成、会合が盛んです。田中伸先生の近世ゼミも昭和42年からスタートし、平成3年に逝去されるまで20年以上開設されました。この間にゼミで教えを受けた卒業生は相当な数になると思われます。一部のゼミ生から消息や名簿作成の声が上がっていることから、今年末の完成を目指して作成に着手することになりました。各年度のどなたかに同期のゼミ生の掌握をお願いしたいと考えております。各期の取りまとめにご尽力いただければ松苓会本部事務局まで連絡をいただかせんでしょうか。よろしくお願ひします。

39回卒同期会開催のため名簿を整理しています

中居功一 (文39)

昭和46年3月に大学を卒業して45年が過ぎました。

同期会は、昭和52年に開催した記録がありますが、昨秋のホームカミングデーの折に、同期有志が集い、同期会開催の相談をしました。

名簿の整理をしておりますので、同期生に声をかけて頂ければ幸いで

す。

松苓会事務局に支援をお願いしております。同期生の消息を松苓会本部までご連絡ください。

福園 剛 (文40)

本日、大学の卒業生作品展に出品いたしました私の拙作が届きました。ひと言お礼を申し述べたくペンを執りました。毎年のことではあります。今年もまた、大変お世話になり感謝しております。私ごとで申し訳ありませんが、日常の生活では、色々な雑多なことがあります。一年の内に、大学の卒業生作品展に応募できることは、この上ない喜びであります。

今年は、こんな作品をつくりたい、来年はこんな作品にしたい、とイメージが湧いてくることは楽しいものです。しかし、出来上がった作品はとてつもない拙作ではありますが、これが今の自分の力とあきらめています。外の展覧会は、技法造形力などを競う為、非常な制約があります。この展覧会は本当に自分を素直に出せるのでありがたいことであります。重ね重ね本当にお世話になります。有り難うございました。

蓮沼さおり (文77)

(漫画家「おかめ中華」)

昨年クリスマスに第19回にいがたマンガ大賞入選をいただきました。熱帯魚を擬人化した四コマ漫画でデ



雨上がりの夕暮れ

ビュー前最後の1作でした。

この時思い出したのは二松で過ごした日々のこと。福島県会津若松から来た私にこんなことも知らないの?という人もいましたが「このやろ!!」と負けずに色々吸収し楽しく学び遊んだ日々。それらの経験が創作の力の1つになっていると思いました。

現在会津の月刊誌『会津嶺(あいづね)』で連載中の起き上がり小法師漫画「起上太郎のつれづれこりん」も連載1周年を迎え、4月に新連載が始まる情報サイト「ワクイロ」でも太郎掲載が決まりました。皆さんの応援が次の作品へと繋がりましたのでまた感想のメールやお手紙を送って頂ければと思います。

supply3001@yahoo.co.jp

(電話) 09075637288

東京都中野区江古田三郵便局留

「都心で学ぼう3 高校生のための国際政治経済」の紹介

二松學舎大学国際政治経済学部
先生方が編集した、『都心で学ぼう
3 高校生のための国際政治経済』が、
昨年11月戎光祥出版から発行されま
した。

本の帯に「日本を取り巻く世界の
『今』がわかる！国際情勢の基礎を、
写真や図表でわかりやすく解説！」
と記されています。

国際政治経済学部は、開設25年にな
ります。それを記念して出版する
ことになりました。

タイトルに「高校生のための」と
なっていますが、大学生や社会人の
方々も読者として想定しています。
ほとんどが、対話形式で書かれて
いるので、気軽に読めるようになって
います。国際政治経済が苦手な方
も、この本を読むとかなり詳しく世
界を知ることができるお薦めの
一冊です。
ぜひご一読く
ださい。



寄付者芳名

85周年記念式典御祝儀

10万円 水戸英則様(理事長)
3万円 菅原淳子様(学長)
呉 英元様(名誉教授)
平野芳彦様(専14)
1万円 石塚法子様(文38)

木内美知子様(文39)
大学父母会様
5千円 飛田正太郎様
(大学改革推進部長)

寄付者芳名

平成28年3月1日から平成29年2
月末日までに寄付いただいた方
ご芳名を掲載します。(敬称略)た
くさんの方のご協力に心より感謝
し、厚くお礼申し上げます。

二十口 三嶽 道子 文39
十口 小田 和磨 専17
哇津真知子 文34
小林 公雄 文38
小林 孝彰 文38
田原迫俊朗 文38
廣田 克己 文38
堀部 忠次 文40
佐藤 修 文41
早崎 静子 文41
山崎 正伸 文41
宮下 宗樹 文43
岡野誠一郎 文45
黒沢 敬二 文45
柴田 善達 文48
佐賀 敦史 文49
柴田すま子 文49
田中 裕子 文49
堅田 弘子 文50
牧原 立 文51
中崎 吾朗 文52
島山 宏良 文56
早野健太郎 文59
川俣 茂 文63
柴田 承寛 文78
藪崎 久雄 文09

五十口 末吉 榮三 専12
平野 芳彦 専14
小澤 幹男 専17
岩佐 稔 専20
藤田 佳應 文24
平山 毅 文26
松田 存 文26
新井 喜義 文37
畠山 幸治 文37
吉野恵津子 文37
市川 友子 文38
山口 由香 文38
渡邊豊太郎 文43
藤井 隆晴 文47
松本 茂治 文49
高橋 映子 文53
川嶋 洋子 文54
上野有美子 文61
相良 恭子 文69
三枝 正和 文70
塩井こはる 文78
四口 神河 秀春 文47
三口 須田 哲夫 専18
須田 哲夫 専18
石原 公子 文33
吉岡 富子 文38

数見 等 文43
村山 典子 文43
福田 博之 文50
鈴木千賀代 文55
坂本 一宏 文67
五十嵐正泰 文09
星野 正貴 文15
二口 荒井 俊郎 文24
青山 孝雄 文36
大森美智子 文37
菊地 正紀 文38
清水 登 文42
菱山 英子 文47
斉藤ゆかり 文51
鈴木 伸 文53
江村 春彦 文57
上田 道子 文68
中野 博之 文73
滝口 明子 文77
石田 公一 文15
金子 篤司 文19
一口 本間祺一郎 文38
及川 郷子 文39

岩澤 静雄 文43
小川 紀子 文44
鉄尾 明彦 文44
中村 良子 文44
伊藤 文雄 文45
河野ミズ江 文45
田邊 義博 文47
長田香陽子 文48
矢澤 喜成 文50
野口 明宏 文51
野口 悦子 文51
尾藤 尚子 文54
松川 明弘 文55
松川 訓子 文55
中沼美智子 文57
高橋 妙子 文71
宮川 望 文71
新田 琢典 文72
石井 千尋 文83
河口 真美 文84
山口 友希 文84
杉山 朋秀 文04
吉田 孝幸 文09
小熊 直人 文10
石川 卓巳 文20

訃報

杉野茂氏(専14・前三重県支部
長)平成29年1月24日逝去
ここに、慎んでご冥福をお
祈りいたします。

支部長交代

大分県 甲斐啓一郎(文52)
平成28年4月3日付
佐賀県 白濱富士夫(文54)
平成29年1月1日付
高知県 戸田 浩(文47)
平成29年1月1日付

表紙写真

二松學舎は明治10年に創立され、今年140周年の節目を迎えました。東京大学も同じ年に創立され、全国でも有数の伝統ある大学です。都心にもっとも近い大学として、周年事業を機に、益々の発展が期待されています。正門に、記念広告をラッピングし、ライトアップを実施しています。

二松學舎
松苓会報
No.57

創
刊
昭
和
6
2
年
1
2
月
1
日
平
成
2
9
年
3
月
1
6
日
二
松
學
舎
松
苓
会
〒
1
0
2
-
8
3
3
6
東
京
都
千
代
田
区
三
番
町
6
-
1
6
0
3
-
3
2
6
1
-
7
4
0
8
0
0
1
8
0
-
5
-
1
6
0
3
4
3
(
郵
便
局
払
込
取
扱
票
)
株
サ
ン
セ
イ
電
話
0
3
-
3
2
6
1
-
7
4
0
8
0
0
1
8
0
-
5
-
1
6
0
3
4
3
(
郵
便
局
払
込
取
扱
票
)
振
替
口
座
印
刷



編集後記

松苓会報57号をお届けします。今回は、卒業生に向けての会長と学長のご祝辞を掲載しました。新たに社会に羽ばたく若人への温かい応援です。また、新しい試みのホームカミングデーの記事、ご退職された先生を囲んでの懐かしい語らいなども載せることができました。85周年記念号以後、昔の事務局の思い出なども続けることができます。今後、クラブや同好会などにも広がっていただきたいと思います。思い出話の一つでも、事務局にご連絡いただければ幸いです。(Y)

二松學舎大学(松苓会)
ホームページ
松苓会 E-mail

www.nishogakusha-u.ac.jp
shourei@nishogakusha-u.ac.jp